令和３年２月２０日（土）　いのちの躍動の舞――最も大切なもの　　第５回の資料

１．◎ゲーテ

（なぜそういう私にも完全な芸術作品が自然の作品に見えるのでしょうか。）

　それは、**その芸術作品があなたのよりよい本性（Natur）と一致しているからです**。**自然を超えているが、しかし自然の外に出ていない**からです。

**２．そのような芸術作品は感情と想像力を束縛し、われわれの恣意を奪う**。**われわれは完全なものを、好き勝手に処理し、支配することはできない。われわれはそれに自分を委ねないわけにはゆかないのだが、そうすることによってわれわれは高められ、改善され、ふたたび自己を手に入れるのである**。…

**自分を捨てて、対象につくことのできる人、強情で、偏狭な我意をはって自己とそのつまらぬ偏見を自然と芸術の最高の作品のなかへ持ちこもうとしない人であるならば誰でも、そのような能力がある**と言えるのである。… **自分の本性をますます鍛える**ことになろう。

**３．考えたりしゃべったりすることはまったく容認しがたく、また無益であり、芸術家はむしろ価値ある対象を自分の目で見ることが必要である。**

**［フィディアスの作品を自分の目で見よ、有り金全部使っても］**

**zu denken und zu reden ganz unzulässig und unnütz ist**［**考えても語っても全く無効で無駄**］

**die rechte Quelle**［**真の源泉**］

**studiere er vor allen Dingen aufs fleißigste　　　　　［何よりもまず最も熱心に勉強せよ］**

４．［フィディアス作ゼウス像は］**人間の形姿に魂を吹きこむことによって人間を人間以上に高め**、その生活および行為の円環を完結し、過去と未来とを包括する現在のために人間を神化するからである。…**オリュンピアのユピテル**を眺めた人々は、このような感情に捉えられた。

「人間を神に高めるために、神が人間になったのである。」　彼らは至高の尊厳を目（ま）のあたりにし、最高の美に胸を打たれた。

人間の**幸福と感謝の念**は、きわまるところを知らない。そして人間は、彼の所有物のすべてを、**帰順と崇拝のささやかな印として捧げたいという気持ちになる**であろう。

◎ゲーテの言葉『イタリア紀行（下）』（岩波文庫）から：

５・（1787年8月23日）私は、一たい**男一匹がどれだけの物を制作し、また成就し得るか**ということについて一個の概念でも得られるようにと、どれほど諸君もここにおられたらと願ったことであろうか！　シックストゥス礼拝堂を見ないでは、一人の人間が何をなし得るかを眼のあたりに見てとることは不可能である。偉大で有能な人物のことをたくさん人に聞いたり本で読んだりするが、しかし**ここにはそれが頭上や眼前に未だに生き生きとして存在するのである**。… 私は全く生まれ変り、改心されそして充実させられたからである。（53頁）

　［同じ日の文章］昨日は騎士フォン・ワースリイのもとで多くの写生画を見た。彼はギリシア、エジプト等を旅行してきたのである。最も私の関心を引いたものは、アデンのミネルヴァ神殿の長押の中層（フリーズ）にある浅浮彫の写生であった。これは**フェイディアスの作品**である。**ここにある若干の簡素な像よりも美しいものとては、とうてい想像もできない**。（55頁）

◎西田幾多郎の言葉

６●「ゲーテの背景」（昭和６年１２月）『続思索と体験』（岩波文庫）

　時は永遠の過去より流れ来り永遠の未来に流れ去ると考えることができる、時は永遠の内に生れ永遠の内に消え去るといってよい。すべて歴史において現れるものはかかる永遠の背景において形づくられたものである。… 時は永遠の今の自己限定としてこれに包まれたものでなければならない。…

　すべての文化についてもそういい得るであろうが、特に芸術はかかる永遠の背景において、歴史によって形づくられるものである。ミケルアンゼロの未完成といわれる彫刻やロダンの彫刻が大理石の塊の中から刻み出されたる如く、偉大なる芸術は永遠という大理石の上に刻み出されたリリーフの如きものでなければならない。（151頁）…

７　**ギリシャの彫刻には、形の美においては一打の鑿をも加えることができないであろう**。しかし**ギリシャの芸術には何となく深さがない**という感なきを得ない。ギリシャの永遠は我々の前に見られた永遠であって、後から我らを包む永遠ではない。キリスト教的文化に入って人格的実在の意義が認められるに従って、芸術に深さと背景とが与えられたということができるであろう。初期のキリスト教的芸術においては、その内面的なるにおいて東洋の仏画をも想い起さしめるものがあるであろう。更に**ミケルアンゼロの芸術に至っては。その内に潜める内的力の偉大さに至っては、黒焔（こくえん）の渦巻く深い噴火口に臨む如き感なきを得ない**。彼の芸術こそ雄大なる深さと背景とを有ったものといい得るであろう。（153頁）

◎ロダン［1840 - 1917］の言葉（高村光太郎訳、岩波文庫）から：

 ８●「若き芸術家たちに（遺稿）」

「美」の司祭でありたいと思う青年諸君。ここに一つの長い経験の決着を見る事は多分君たちを喜ばせるでしょう。

**君たちに先だつ大家たちを心を傾けて愛されよ**。

９ 　**フィディアスとミケランジェロとの前には平伏せよ**。前者の神々しい明浄、後者の猛烈な惨痛を讃嘆せよ。讃嘆は高い精神に対する一つの醇酒です。

 　しかしながら君たちの先輩を**模倣せぬように**戒めよ。伝統を尊敬しながらも、伝統が含むところの**永久に実あるもの**を識別する事を知れ。それは**「自然の愛」と「誠実」**とです。これは天才の二つの強い情熱です。天才はみな自然を崇拝したし また決して偽らなかった。

10　かくして伝統は君たちに**きまり切った途から抜け出る力になる鍵を与える**のです。**伝統そのものこそ君たちに絶えず「現実」を窺う事をすすめて　ある大家に盲目的に君たちが服従する事を防ぐのです**。…

**11 かぶりついて仕事せよ**。…

**美しい彫刻には、いつでも一つの強い内の衝動を感じる。これが古代芸術の秘訣です**。…

**休みなしに稽古せよ。手業（メチエ）に身を馴らさねばなりません**。…

12　**辛抱です！　神来（inspiration）を頼みにするな。そんなものは存在しません**。

**芸術家の資質はただ智慧と、注意と、誠実と、意志とだけです。正直な労働者のように君たちの仕事をやりとげよ**。真実であれ、若き人々よ。…

**13 深く、恐ろしく真実を語る者であれ。自分の感ずるところを表現するに決してためらうな。たとい既成観念と反対である事がわかった時でさえもです**。**おそらく最初君たちは了解されまい。けれども一人ぼっちである事を恐れるな**。**友はやがて君たちのところへ来る。なぜといえば一人の人に深く真実であるところのものはいっさいの人にもそうであるからです**。

 　しかし色目はいけない。公衆の目を惹くため　しかめ面をしてはいけない。**単純、率直！**…

14 **肝腎な点は感動する事、愛する事、望む事、身ぶるいする事、生きる事です。芸術家である前に人である事！** …

15 **正しい批評を受け入れよ**。…**不正の批評を恐ろしがるな**。…

もし君たちの才能がきわめて新らしいと、**君たちは最初ほんの少しばかりの賛同者しか得ないで　しかも群衆の敵を持ちます**。

16 **勇気を失うな**。前者が勝ちます。なぜといえば彼らはなぜ君たちを愛するかを知っているのに、後者はなぜ君たちが嫌いなのか知っていないからです。前者は真実に対して情熱を持ち　また絶えず新らしい同人を集めるのに、後者は自分たちの間違った意見に対してどこまでも続けてゆく熱中をまるで表わさない。前者は頑固であるのに、後者は風のまにまに変る。真実が勝つ事は確かです。

17 **世間的もしくは政治的関係を結ぶ事で君たちの時間をつぶすな**。

君たちは君たちの多くの同僚が計略によって光栄を得　また資産にありつく事を見るでしょう。それは本当の芸術家ではありません。その中のある者はしかしながらきわめて叡智に富んでいて、もし君たちが彼らの畑で彼らと争い出したら君たちは彼ら自身に劣らぬほどの時間、即ち君たちの全存在を消費してしまうでしょう。**つまり芸術家たる一分間も君たちにない事になるでしょう**。

18 **情熱をもって君たちの使命を愛せよ。これより美しい事はない。君たちの使命は凡俗の考えるよりも遥るかに高い。**

**芸術家は偉大な手本を与える**。

19 **彼は自分の職を崇拝します。彼の一番貴い報償はよく作る事の喜びです**。

現今では、ああ！　世人は労働者を駆って仕事を嫌わせ仕事を故意に怠けさせて彼らを不幸にしています。

20 **世界はいっさいの人々が芸術家の魂を持つに至る時でなければ幸福にならない。即ちいっさいの人々が彼らの課業に悦びを持つに至る時でなければ**。

**芸術はまた誠実という事の大きな教訓です**。

21 **真の芸術家はいつでもいっさいの定説となっている偏見を紊（みだ）す危険を冒しても自分の考えるところを表現します**。彼はかくして他の人々に正直を教えます。

 （1911年ポール・グゼル氏の筆記にかかる。ロダンの意向で死後遺稿として発表された。）

●他の言葉（岩波文庫、同じ本から）

22・私の事について少しばかり話してよろしいなら、私は一生涯、彫刻のこの二大傾向の間を、フィディアスの考えとミケランジェロの考えとの間を、往ったり来たりしていたのですね。

　私は古代彫刻から出発しました。けれどもイタリアに行った時、たちまちこのフィレンツェの大家に捉えられてしまった。私の制作は確かにこの熱情の影響を蒙っています。

　それから後、殊に最近に至って、私はまた古代彫刻に帰りました。（256頁）

23・**決してどんな芸術家でもフィディアス以上にはなれないでしょう**。なぜといえば進歩は世の中に存在するが、芸術には存在しないからです。いっさいの人間の夢が一殿堂の破風の中に閉じ込められ得るような時代に輝いたこの最大彫刻家は永久に無比でいるでしょう。（253頁）

24・美しかったのは、裸体であると人々は考えた。私には、それは生命である。（364頁）

25・ギリシアは他のすべての国以上に彫刻の国であった。彼らの彫刻の**主題はいのちであった**。それを種々の名前や表象の下に隠した――ゼウス、アポロ、ヴェヌス、フォーヌなどと――しかしこれらいっさいのものの**背後にいのちの永遠の真があった**。… これ以上美しい捧げ物を人や神に捧げ得ようか。なぜといってこの断片こそ永遠の祈りではないか。（99頁）

26・何をおいても、**古代芸術は生命そのものです。古代芸術よりもよく生きているものはありません**。そして世界にある様式で古代芸術のようにいかに生命を訳出すべきかを知っていた、もしくは訳出する事の出来たものはありません。

古代芸術はいかにして生命を訳出すべきかを知っていました。それは古代人が世界中で一番偉大な一番真摯な、一番讃嘆すべき、自然の観察者であったからです。（176頁）

27・私の考えでは、ギリシアが**われわれの師**です。彼らのように彫刻を作り得た者はかつてない。彼らはその**彫刻の脈管の中に血を溢れさせる事を知っていた**。この根本の事に較べると主題などというものは何でもありません。（196頁）

28・彫刻家が自分の研究する**形に偉大な性格を認めた時**、一時的の線の中から各生物の永遠的な形象を抽き出し得た時、一切諸法の原本である不変のモデルを聖なるもの自体の中に見別けたような時、**この彫刻家はそれでもまだ礼拝した事にならないか**。

**形を普遍化する天賦、即ち生きた現実を空虚にする事なしに形の理法を表わす天賦を持っている芸術家は、みな同じ宗教的感情を生み出します。なぜと言えば、彼は不朽の真実の面前で彼自身体験した戦慄をわれわれに伝えるからです**。（224頁）

29・何を生命と呼ぶか。あらゆる意味から君を激動させるもの、君を突き貫くものの事です。…

30 だから私が年中古代彫刻と一しょに生きているのを不思議がる事はない。古代彫刻は現存するある者よりも力強い詩人だ。古代彫刻の作った魂は私の陳列箱の中でわれわれ自身のよりも活きている！（317頁）

31・**ミケランジェロ、これは生命の息である**。人間精神はここに至って崇高に触れる。つねに見るところでない。あの思想の偉大な成熟。…ミケランジェロは美を呼吸する。（357頁）

32・美しかったのは、裸体であると人々は考えた。私には、それは生命である。（364頁）

**33・古代彫刻！私は自分が彼に対して持つこの永遠の愛に生きねばならない事を感ずる。**（369頁）

**34・彫刻に独創はいらない。生命がいる。**（371頁）

◎『ギリシャの美術』（澤柳大五郎著、岩波新書）から：

35 （パルテノンのアフロディテに関して）　**この群像を観るためにだけでもひとはロンドンまで行く価値がある**。**その絶美**を伝える力はわたくしにはない。・・・
36 （ミケランジェロの横たわる女性の彫刻においては）腕はともすれば沈みがちの上体を辛うじて支える。目覚めようとしながら肉身にはまだその重みを起こすだけの気力を持たない無感覚が全身に漲って居る。精神と肉体との相克、重心はうしろの方にかかってこのままの姿勢では幾分を堪えられるだろうかというようである。**これに対してパルテノンのアフロディテはいかにもゆったりと横たわった状態から軽やかに身を起こす。**・・・**その身のこなしにはいつでもつと立ち上がれる敏捷さが窺われ、些かの努力も見られない全身**は各部の微妙なバランスを保って居る。（190頁）・・・

37 ロダンもどこかでギリシアの立像は胸、腰、上腿、脛の四つの面が相互に平衡を保って居るのに、**ミケランジェロでは上体と下半身との二つの面が相反する力で拮抗して居る**という意味の言葉を語って居た。これはもとよりミケランジェロを貶したのではない、ただギリシア彫刻の力の均合った調和、均衡の美を讃えて居るのである。ミケランジェロが悩み、またそれによってその彫刻が人を打つような肉体と精神、内と外との乖離をギリシア人は知らなかった。**内と外との一致、精神と肉体の合一、我々がギリシアの美術を称揚する時によく使うこういう概念さえギリシア人には理解できないのではなかろうか。一致とか合一とかいう考え方が既にそれらが離れて居ることを前提とする。**・・・

38 ギリシア人はこの二つのもの（と現代の我々が考えるもの）をはじめから離れ難く結びついた一つのものと考えて居たであろう。・・・
 　古典期の彫刻、中でもパルテノンの彫刻を見ればこのことは万巻の書物に勝って些かの疑いもなく心に沁み込んで来る。（191頁）

39 原作と模倣

　ギリシア彫刻の原作に接した時、わたくしは思わず《On m'a trompé！私は欺されて居た》と呟（つぶや）いた。

40　無論わたくしはギリシア彫刻に原作と模作のあることを知って居た。ヴィンケルマンやゲーテの時代と違って今ではどんな美術史の本でも原作と模作とははっきり区別されて居る。誰もわたくしをだましたわけではなかった。… それにも拘らず日本で抱いて居たわたくしのギリシア美術観が根柢から揺ぐのを感じた。**原作と模作との天地の差はわたくしの予想をはるかに超えていた**。（19頁）…

41 最も大きな相違は模作はどこまでも模作であって本然の創造ではないという点である。…謂わば詩とその翻訳との関係に似て、原作は内から湧き出る初発の生命をもち、模作はその最上の場合でさえ本来の作因（創作の動機）を異にする再創作に過ぎないのだから。（28頁）…

42 多数の模索がヨーロッパの美術館、またギリシア美術史の図録や挿絵を満たして居るまさにそのことが今日の美術家や一般の人々をどれほどギリシア美術から遠ざけて居ることか。ギリシア彫刻はただ合理的で冷く、エジプト美術やエトルスク美術のような、汲みつくせない、内に秘められた力を持って居ないという印象は、模作を通してギリシア美術を考える限り、まことにその通りである。

43　わたくしは読者に申し上げたい。**模作には一切目も呉れず、ただひたすら原作にのみ接し給えと**。若しひとがギリシア盛期の原作にのみ接せられるならば、この調和と均斉の民、端正典雅の人間の作品のなかにもまた**測り難く奥深い、究めつくせない人間の心の奥底から湧き出る初発の生命を感ぜられるに違いない**。（29頁）